

# WE INSIST!

## 福島原発事故から10年、 未来への絶対条件を欠く政治

東日本大震災・福島第一原発事故から10年が過ぎた。当時、原水禁は1年間の議論を経て「原水禁エネルギー・プロジェクトからの提言・持続可能で平和な社会をめざして」と題する脱原発そして再生可能エネルギー中心の社会をめざす提言をまとめ、3月の初頭に、民主党政権下の内閣府に提出した。受け取った平野達男内閣副大臣（当時）の「原発はないほうがいいと考えている」との発言に、意を強くしたことを覚えている。私は、提言のまえがきに「原水爆禁止日本国民会議は、『核と人類は共存できない』ことを基本に活動してきた。私たちは、政府が本腰を入れて自然エネルギーの活用に踏み出し、低炭素社会、脱原子力社会をつくりあげることが熱望する」と書いた。しかし、その直後の3月11日、東京電力福島第一原発は取り返しの付かない過酷事故を起こした。以来10年、原水禁は脱原発を熱望する多くの仲間とともに「さようなら原発1000万人アクション」の運動を展開し、学習会、講演会、17万人を集めたさようなら原発の大集会、立憲民主党を中心とした野党と「原発ゼロ基本法」の制定運動など、精力的に活動してきた。世論調査では、原発に反対する人々が圧倒的だった。しかし、私たちは日本社会を変えられたのだろうか、そのことを問うたびに忸怩たる思いがする。

65才を超えて、人生の先がだんだんと見えてくると、人は過去に目を向けるのだろうか。幼き頃の記憶がたまに蘇る。北海道の湖の畔、小川が何本も流れ、水田とその向こうの丘には豆畑が広がる、山と川と湖、子どもたちは毎日トンボ取りに興じる。アキアカネなどは目ではない、オニヤンマかギンヤンマを狙う、シオカラトンボでは満足できない自然があふれていた。グズベリや野いちご、山栗、おんこの実、食べ物に事欠かない豊かな山野。リュックを背負った私は、父のオートバイの荷台に載って山菜採りに出かける。根曲がりのタケノコ、蒨、蕨、タラの芽、豊かな山菜は、夕餉の膳を飾った。日本の原風景が、そこには確かにあった。

今、福島の山野はどうなっているのだろうか。除染もできず高い放射線量のままに放置されている。子どもたちの声が、山野から消えて10年がたつ。「美しい国・日本」、誰かが言っていたその原風景を壊滅させた原発事故。それでもなお再稼働に向けてひた走る政治。800トンもの溶融した

燃料デブリの全容は全くつかめず、廃炉まで事故後40年としたが目途は全く立っていない。デブリの再臨界を防ごうとする冷却水は、放射性物質によって汚染されたままに海洋に放出するしかないとされている。福島第一原発は、一体いつまで放射性物質を放出し続けるのか。答えはどこにもない。誰もが回答を出せないままに、時間だけが進んでいる。

「戻れぬ故郷、1人だけの卒業式」と朝日新聞が報じた、この春の浪江町立津島小学校の卒業式。原発事故当時は58人の児童が学んでいたが、バラバラになった仲間たち、原発によって壊された思い出。1人だけ卒業して、この春学校は休校となった。地域から学校が消えていくことの意味を、地域から子供たちが消えていくことの意味を、この国の為政者はどう考えているのだろうか。

生まれた翌年には「もはや戦後ではない」といわれた私たちの世代、東京五輪が9才、大阪万博が15才、高度経済成長の時代を、私は子どもとして駆け抜けた。大学入試のその時、第1次オイルショックで経済成長の時代は終焉を迎える。終焉を迎えて、「資本主義社会の危機」とも言われる現在、日本社会は、「東洋の奇跡」と呼ばれた経済成長の成功にとらわれすぎてはいないか。そのことが、日本社会の発展の阻害要因になっているように思う。

1966年8月、福井県美浜町で本格的商業炉として関西電力美浜原子力発電所の建設が始まった。3年の年月を経て始動した美浜発電所1号機は、1970年8月8日大阪万博会場へ原子力の電気を送った。関西電力のホームページには、『万国博に原子の灯を』は、美浜発電所建設を進める関西電力の合言葉となった。その実現に向け、建設現場で汗にまみれてきた社員たちにとっては、万感胸に迫る送電の成功だった」と記載されている。大阪万博が経済成長の金字塔とすれば、原発はその経済成長を支え続けた立役者といえよう。しかし、右肩上がりの経済成長の時代は終わり、それとともに電力需要も伸び悩むこととなった。そして、福島第一原発事故が起こる。戦後の闇市から始まって豊かな生活を欲し、三種の神器をきそって買い求め「一億総中流」などともてはやされた時代から、私たちは今、有限な資源と生産の中で、いかにそれぞれが満足した生活を送ることができるのか、競争から共存へと社会を変革することが求められる時代にいる。そのためにも、経済成長の象徴たる原子力発電との決別が必要だ。しかし政府は脱原発を決断せず事故の責任さえ認めようとしない。この二つは、日本の未来への絶対条件といえないか。

(藤本 泰成)